

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

☎ 692-0064
島根県安来市古川町 534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

新名人に聞く

安来節との出会い



絃名人 須田 茂善
(斐川支部)

私は、戦時中、学徒動員で戦争の為、兵器工場となった八束郡宍道町(現・松江市宍道町)の大和紡績工場で潜水艦の魚雷などを作っていました。当時、十八歳だった昭和二十年八月十五日に終戦となり、そのまま会社に残りました。その会社の先輩に安来節の師範の方がおられ、習い始めたのがきっかけです。

昭和二十四年の宍道支部発足に伴い、保存会に入会しました。支部の練習は土曜日の夜でしたので、仕事を終え、家に帰り、ご飯を食べてから自転車ですり道を通ったものです。小川幸雄先生は、三味線は唄を上手に唄わせる事が役目で安来節は唄う人によって全部違うので難しく、大変だと言われました。

その頃、保存会とは別に「金鈴会」という会があり、片部さん、小愛之助さん、川島重蔵さん、新田松次郎さんなどの有名な方がおられました。新田松次郎さんは初代出雲愛之助さんの唄の尺八伴奏をされていた方です。

昭和二十六年、宍道町の料亭で資格審査会を受け、絃の二級を取得し、二十九年には一級、三十二年には師範になりました。昭和三十三年十一月二十三日には「故 二代目渡部お糸追悼供養」が大東小学校の講堂であり、宍道支部から唄・小川幸雄、

絃・須田茂善、鼓・岡本晋一で出演しました。

昭和四十二年に一時、保存会を脱会しましたが、昭和四十八年の斐川支部発足と共に再入会しました。

昭和五十三年十月十五日には名古屋市民会館で開催された「全国民謡まつり」に唄・三代目渡部お糸、足立 稔、絃・森田要市、須田茂善、鼓と男踊り・原文男、銭太鼓と女踊りは安来の日立金属工場の女性十人で出演し、大盛況でした。

今年、一月十日には安来節保存会より三味線名人に昇格させていただき、身の引き締まる思いです。今後、身体の続く限り保存会、並びに会員の皆様に貢献して行きたいと思っております。皆様方の温かいご支援、ご鞭撻賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

プロフィール

◆生年月日

昭和四年十月二十八日

◆保存会役職

資格審査員

◆入会年月日

昭和二十八年宍道支部へ入会

四十二年に休会

昭和四十八年斐川支部設立と共に再入会

◆活動記録

現在 毎週三回、松江玉造温泉宿での公演、安来節演芸館での出演

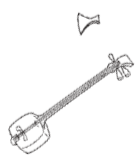
私と安来節



資格審査員 原文男
(松江支部)

私は安来節の本場、安来の街に近い伯太町(現・安来市伯太町)に生まれ、小学四年生の時に安来節を始めました。習い始めて間もなく、優勝大会で入賞しました。また支部の講習会には父に連れられて出席し、唄の初代出雲愛之助先生をはじめ、絃の初代安達順吉先生、鼓

私と安来節



の高山雅市先生にご指導頂きました。大先生方を前に緊張したまま長時間正座をし、膝を叩いてテンポをとり、大声を出して稽古をしました。上手いかない所は、先生から「もとへ」「もとへ」と繰り返し練習させられた事を今でも覚えています。このようなご指導があつてこそ今の自分があると先輩方に感謝しております。

一時、保存会を休会したものの、三十四歳で再び安来節を始め、民謡ブームの頃には仲間と稽古に励んだものです。安来節に出合つて七十年余り、振り返ると時代は大きく変わりました。しかし安来節の演技に触れ、涙を流して喜んで下さ

出会いに感謝



指導部員 野々村府美枝
(本部道場)

優しい表情、じつと目を閉じ、姉妹弟子である渡部皆江さん(家元三代目渡部お糸さんの愛娘)と私が交互に唄う声に耳を傾け、ベッドの傍らで聞き入つて下さっていた家元三代目お糸さん。そのお糸さんとの出逢いを作ってくれたのが父でした。

その昔、父達の若い頃は酒の席で必ず唄われたのが安来節、次いで安来拳で調子が一層盛り上がり、私は子供心に「安来節って楽しい」という記憶が心の奥に植え付けられていたのでしよう。短大を卒業して安来市内の保育園に勤め始めた頃に、市内の鉄工所に勤務して

る方もあります。そのような方の様子を見ると、いつの時代も変わる事なく安来節は人の心に響くと感じ、嬉しく思います。

昨年、安来節が安来市無形民族文化財に指定されました。鼓の半間の妙技、昔から変わらぬ感情のこもった唄、絃の二枚撥、チリテンの切れの良い音色、どじょうすくい面白さ、どれをとっても無形民族文化財にふさわしい技ばかりです。私は安来節を次の時代に伝えるため、これからは微力ながら力を尽くしたい、このように思っております。

名人になられ、その名安来節保存会のみならず他の民謡界にも名実ともに不動のものになりました。

安来節に出合えた事、そして沢山の出逢いの中、命懸けで助けて下さった方々、たかが安来節されど安来節という言葉を実感しつつ、保存会の指導部員として活動し、亡き三代目お糸さん、亡き野坂亮利先生はじめ、諸先生、諸先輩の方々からの大切な言葉を伝えるべき使命感で努めさせて頂いております。多くの支部の方々との出逢いの中、これ程までに安来節が愛され、唄われ、親しまれている事に唄う者の一人というよりも、安来市民の一人として言葉では言い表せない程の感謝で一杯です。ありがとうございます。

安来節の持つ「力」は計り知れないものです。その安来節も安来市無形民族文化財となり、これを機に一層の発展を願います。全国に発信していく為にも微力ですが、尽力させて頂き、私も今以上に努力して参りたいと思っております。

松江藩の感謝状

よろずや 萬屋へ

山陰道鎮撫使騒動記 ①

江戸時代が終焉を迎えようとする慶応三年（一八六七）十二月、王政復古の大号令が発せられた。そこで新政府は全国の各藩に対して忠勤の意思があるかどうかを調べるために鎮撫使を派遣した。松江・松平藩には西園寺公望を総督とする総勢四百四十名の大部隊が西進して、翌四年二月二十八日滞在先の米子から宿泊の予定であった安来の町を素通りして、夕刻松江に到着した。

当時、松江藩の態度が曖昧で「其意不審」とされて難題を突きつけられたが、恭順の意を示して誤解が解かれたために、家老大橋筑後は切腹を免れることができた。この一大騒動が一転して落着いた松江藩では安堵の胸をなでおろした。鎮撫使は松江藩はもとより支藩である広瀬・母里両藩の誓書を取り付けて初期の目的を達成した。大部隊は翌三月二日、松江を離れ平田で泊り出雲大社に参詣した後、宍道、揖屋に泊り、同月六日昼過ぎに安来に到着した。当日は風雪がはげしく大荒れの天候であったが、一泊して翌朝八時、大部隊は松江藩から多数の献上品を受け取って帰途についた。

さて四百四十名という大部隊の宿泊先は御茶屋御殿をはじめ町内の庄屋や商家に割り当てられた。御茶屋御殿とは安来の町の中程にある小高い丘の愛宕山の東側から現在のJR安来駅に至る千五百坪にも及ぶ広い屋敷で、藩主の参勤交代の際の宿泊や役人の領内巡回の折の休み処であった。建物は壮麗、庭園は優雅であり、松江藩の権威を示しており、安来の町では際立ったものであった。

かねてからこの御殿の営繕や物資の調達をはじめ折々の接待を幅広く担当してきた萬屋が中心となって、この度の鎮撫使一行のもてなしに従事したことに対して、明治二年、松江藩は民生局の名のもとに感謝状を送ったのである。その文面を読み易くすると次の通りである。



並 河 健 蔵

覚

能義郡安来町 萬屋

順佐衛門

その方儀 鎮撫使御下向の刻

昼夜の懸け引き並びに御用宿

引き続き実町相勤め候趣

奇特の事に候、仍て

褒美として、鳥目式貫文

これを遣す

巳五月廿七日 民政局 印

契印

右の通り仰せ渡せられ候条、御書き付けの趣、有難くその意を得られべく候

(以下略)

これを要約すると次の通りである。

その方は鎮撫使が当地へ来訪された際には、昼夜を問わず常に臨機の処置をとり、一行の宿泊に当たっては誠実にあい勤めてくれたことは、大変殊勝なことである。よって褒美として鳥目式貫文を与える。

この感謝状をよむと、萬屋の功労が具体的に記されており、褒美まで与えたいことを考えると、松江藩の安堵と喜びが一方ならぬものであったことが理解できる。

なお萬屋の現在の当主は鷺野鉦一氏であり、この感謝状は代々同家に大切に伝えられている。



私と安来節

「安来節」と出合って三十数年



唄 准名人 今岡 淑子 (本部道場)

安来節を始めたのは昭和五十八年四十才になったときでした。

地元の公民館で橋本光世先生と足立茂実先生が安来節教室を始められるらしいと聞く間も無く、私も教室に誘っていただきました。このときが「正調安来節」との出合いの一步でした。

当時私の父は民謡が好きで三味線を弾いて唄っていました。私一人ではなかなかうまく唄うことが出来ませんでしたので、「それでは一度教室へ行ってみようか!」と思いたち教室に参加することにしました。

安来節の唄(安来千軒……)数ヶ月習いどうに



唄 准名人 山崎 眞由美 (益田支部)

私が安来節を始めるきっかけとなったのは、母でした。母は、近所で開かれていた三味線教室に通っており、簡単な民謡をなかなか覚えられずいたことがもどかしくて、自分がやってみたくなりました。先生宅に行くと貴女は若いから『安来節をやってみては』と勧められ、安来節が何かも解らないまま始める事になりました。

唄と三味線を同時に始めることになりました。最初は唄の三節が難しく感じ、なかなか覚えられず、自分の音感の悪さに悔しい思いをしました。それでも、何とか克服したいという気持ちで、当時は寝る前にテープで流しながら、いつの間にか止まっているという日が続き、一生懸命にお稽古したような気がします。

その頃大病を患っていた母も、安来節の審査がある時には、こっそり見に来てくれました。その母も

か唄えるようになり、続いて三味線を教えていただき、今日に至っています。

安来節というのはどなたもおっしゃるようになっても奥が深く私もまだまだ唄えるようになったとは思っていません。

本部道場に籍を置き、先生方のご指導の下、何とか今日まで休まず続けて来られました。そして、鼓は糸賀先生に習い、銭太鼓は初めての挑戦で師範に合格しました。

家元・お糸先生には国内外の公演につれて行っていたいただいており、とくに、東北の災害復興支援公演に行きましたが、どこに行っても安来節は大変喜ばれ、やりがいを感じました。

昨年には安来節が「安来市無形民俗文化財」に指定され、ますます安来節の存在は重要な位置を占め、皆さんと共に守り保存しなくてはいけないと思っております。

一人の力は微力ですが、みんなで力を合わせればもっと大きな「保存会」になります。今年は唄准名人の資格をいただき、身が引き締まる思いです。微力ではございますがこれからもより一層精進し、安来節発展のため頑張っていこうと思っております。どうぞよろしく願います。

じきに亡くなり、私も結婚しましたが、安来節をすることを応援してくれていた母を思うと、仕事と育児の忙しい日々でも続けることができました。

また、主人も『男踊り』を始められ、子供をクーパーンに寝かせて、教室に通う日が続きました。時には、先生のベッドに寝かせてもらったこともあり、それは今でも大切な思い出です。

この環境の中で、子どもも自然と安来節の世界に入り、今でも一緒に稽古することができています。また、娘婿も入会してくることにになり、共通の話題も出来て、安来節が家族を繋いでくれるものとなつていきます。

昨年、主人も突然亡くなり、落ち込んだ時も家族や仲間を支えられ、今があります。安来節に癒され、慰められ、励まされてきたからこそ、今日まで続けられたのだと思っております。

この度、准名人に昇格させていただいたのも、自分の力ではなく諸先生方や、保存会の皆様のご指導のおかげと深く感謝いたしております。

まだまだ未熟で学ぶところばかりですが、今後とも一層精進しなければと考えております。

これからも、皆様の温かいご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



板井行勝 (岡山支部)

私は、会社等の宴会で余興は出来ない、カラオケを歌っても下手で、何か自分に出来る芸はないかと探していたある日、テレビでどじょう掬い踊りを見て、これは面白いと感じ、余興に良いなと思いました。さっそく踊りの先生を探す事にしました。会社関係、友人知人に聞いてみましたが、知って

いる方は誰もいませんでした。それから数ヶ月が経ち、先生をご紹介いただき、平成十三年一月に入門しました。歩行、笑顔、踊りの順番がなかなか覚えられませんでした。先生に熱心に教えて頂きました。

数ヶ月もすると、この踊りは足腰にすぐ負担が掛かる事がわかりました。この姿勢では良い踊りが出来ないと思い、会社帰りにスポーツジムに通い、筋力トレーニングと有酸素運動を始めました。数年後、初段に昇格して初めて全国優勝大会予選に出場しました。が、通過出来ませんでした。「来年は予選を通過するぞ」と心に誓い、練習に励み、翌年の二段の時



佐藤早苗 (神門支部)

私が安来節を知ったのは、子供の頃で、当時は村の祭りや何か祝いで、五人も集まり、お酒を飲んだ際にすぐ安来節が出たものです。手を打ち、それを擦り合わせるようにしながら、唄う姿はまさに労働歌といった風で、今の安来節は当時から見れば、随分様変わりしてきたなという感じがあります。

昭和四十年代の頃、主人が我が家で安来節教室を始めた時は、まったく興味も無く、門外漢で一度の教室の日は、座布団を並べたり、お茶を沸かしたり、裏方に徹しており、後に私が安来節を習うなどとは夢にも思わない日々でした。

私が安来節を正式に習い始めたのは、平成元年頃で、もう我が家では教室はやめていました。孫達の面倒を見ながらの生活の中で、余暇を見つけて、何か習い事をしようと考えたのが、安来節だったのです。ライフワークとして身に着く事になった安来節教室でしたが、私が幼い頃からうる覚えの安来節では全く通用しません。主人



横山由美子 (和歌山支部)

「ドーン・ツ・テン！」三味線鼓の合図と共に、心は全開！ヒョイ、ヒョイと舞台へ歩み出る。スポットライトを一身に浴び、まはゆい。観客の方の顔がほころんで

いる。どじょうすくいを演じる私の手、足、腰、顔、身体も全開、絶好調。一昨年の六月、台湾・鳥来活力村へ文化交流で訪問、和歌山県民謡連合会の一員として、どじょうすくいを披露しました。安来節と縁を頂いて半年足らずの踊りに拍手喝采、泥の中、どじょうを探す所作、上手く捕え、ニンマリ、泥を払ったら泥が目には、逃がしたどじょうを見つけて喜び、足の蛭に驚き…と三分余りの短い時間でこれだけのストーリーが

表現されている。国や言葉、習慣が異なっても起承転結が伝わった。そのどじょうすくいに「すばらしい！」と絶賛、嬉しい体験でした。三年目の今年、浮気する事なく、一心不乱にどじょうすくいを真摯に極めて参りたいと思います。「ドーン・ツ・テン！」は私の人生を豊かにしてくれる魔法の旋律です。これからもよろしくお願致します。

“御礼” 師範への道のり



川上和昭 (岡山支部)

私は、一消防職員(主に救急救命士)として、一区切りを終えた今でも、勤務を継続しています。堅い業種と柔らかい趣味。今から思えば、このつながりのきっかけは、保育士をしていた妻からの一言でした。「保育の中で銭太鼓をしたい」と。以来、銭太鼓から唄、どじょう掬い踊りへと、今は変わっているものの、新鮮な気持ちでのチャレンジ精神は

変わっていません。今現在、岡山支部に席を置き、良い仲間達に恵まれて活動を行っています。ご指導して頂いている諸先生方の熱心で温かいご指導があるからこそ、今の自分があると自負しています。元来人前で話が苦手だった自分が、人から感動した言葉や和やかな笑顔を頂く事が出来ている自分がある事に、不自然に思う友がいます。私は、どじょう掬い踊りへの関わりは、当初は正調踊りをしていましたが、今では原流(通称三角ザル)の踊りを行っています。幸いにもこの踊りで念願の師範に合格出来た幸せを恩師の先生と共に嬉しく感じています。正調踊り同様に、ますます原流の踊り手が増える事を期待してペンを起きます。



吉川敏子 (米子支部)

私が生れ育った奥出雲も今はトロコ列車が走り、茅葺屋根のお寺の庭には黄金色の何百年も経った銀杏の木が水面に映り、山々も紅葉し、美味しい地産の作物と豊かな山里になりましたが、昔は雪深い便利の悪い片田舎でした。人が寄れば唄を唄い出し、「ほっかぶり」をして着物の端をからげたおじいさんが、お盆を持って踊り出します。それを見ながら私も大きくなりました。

久し振りの同窓会で地元の人はずばらしい安来節を聞かせて下さいました。いつも聞いて育ったはずの私は唄えませんが、せめて唄の一節でも唄えるようになりたい一心で、今は亡き国尾先生の教室に入れて頂きました。先生と向き合っ

て座り、机を叩いて拍子を取り、一緒に唄って頂き、一年生からの勉強です。その唄にまさかの審査

があるとは大変です。昭和六十二年に初めて審査を受け、三級を頂き、友達と二人で夏の全国大会に出場する事が出来ました。私にとって生涯忘れられない出来ない最高の舞台でした。国尾先生をはじめ、諸先生方のご指導と皆様を励まし、支えて下さったお陰で師範にも昇格する事が出来ました。また、色々な所で唄を聞いて下さる方が笑顔になって喜んで下さると「安来節を習っていて本当に良かった」といつも心の中に温かいものを感じています。

八十路の坂も随分越しましたけれど、まだもう少し皆様と楽しく安来節を習い続ける事が出来たら、こんな幸せな事はないと思えます。どうかよろしくお願ひ申し上げます。

花の安来で 生まれて育ち 今じゃ世界の安来節

Advertisement for drum shops. Left: 大小鼓製造卸販売 杉本鼓店. Right: (有)仁木三味線. Both provide addresses and phone numbers in Shiga and Kanagawa Prefectures.

支部情報

支部創立四十周年



末富 裕 (山口支部)

記念式典は、平成二十六年十二月七日に盛大かつ厳粛に行なわれまし

たが、樽井支部長さんのご挨拶は要点のみを纏められた極めて簡素なものでした。それだけに私は、支部創立の頃から寸暇を惜しんで中国山脈を数限り無く越えて、ひたすら芸を磨かれ、また五代目支部長として会の発展にご尽力された永い年月の御苦勞をお察しし、尊敬と敬意を心から感じると共に、親しくご指導頂いた十年間を改めて有り難く思い浮かべていました。

諸芸に一目惚れ、妻と揃って入会しました。同期の入会者が十名もあり、月二回の稽古日は大盛況、しかし見るとするとでは大違い、音痴で運動神経も鈍い私は「軍歌じゃない。手の開いた所から歌いなさい。」と何度注意された事か。先生や会員の皆様の足を引っ張る不肖の生徒でしたが、メンバーの皆様の温かいご好意に支えられ、今日まで楽しく過ごさせて頂きました。

しかし現在、超高速で進む高齢社会の荒波を厳しく受けており、老齢による心身の不調で余儀なく退会者が続出、新規入会者も思うに任せず、八十五歳の私も色々悩んでいます。保存会活動の最大の使命は、貴重な文化遺産である安来節を正しく後世に伝承する事は勿論の事ですが、社会環境の急変に対応して、地域社会活動を明るくし、高齢者を元気にするうえから、最高の効果が期待出来る安来節を、この視点からの活動を始めてはどうかと思案している所です。

靖国神社で銭太鼓



原田 キミ (大江戸支部)

新春の平成二十七年一月五日、東京の靖国神社の能楽堂で、奉納芸能として出演しました。

軽快に銭太鼓が始まると初詣に来られていた企業の団体の方々が、集まって見て、楽しんでいただきました。東京では、まだまだ実演を見る機会が少ないので、少しはアピール出来たかなと思えました。とても楽しんで頂き、今年も頑張ろうと力を頂きました。



日本民謡協会主催の国技館での全国大会にも出演、銭太鼓のお陰でたくさんのお客様をさせていただいております。

会員の声コーナー

座間市国際交流協会の親善交流に参加して



棚橋 保 (東京支部長)

座間市は、東京都と神奈川県との境にあります。西は座間の米軍基地があり、東は日本への出稼ぎの外国人が多く住んでいる所で、その地域の特性から地元での国際親善交流が出来ないかという思いで実現したかと思われた。そして図らずも日本の郷土芸能・安来節が主催者側からの要請として出され、安来節を披露する機会を得た。



一月三十一日、会場のサニープレイス座間多目的室は「世界各国の国旗が掲げられ、国際色たっぷりの雰囲気となり、昼休みには、各国の民族衣装が陳列されている所から自由に借りて、記念写真を撮ったりして楽しんでいました。

当日の参加者は日本人約一四〇名、外国人は「インドネシア・中国・ネパール・ブラジル・ペルー・米国」など七カ国の三十人が参加した。もう一つ

の特長は、それぞれのお国自慢の郷土料理を持ち寄り、参加者全員に振る舞い、一緒に食べた事である。例えばブラジルの豆料理「フェジヨン」、ネパールのジャガイモ料理「アルコアチャール」、中国の餃子等々。

本番のステージでは、インドネシア・バリ島のきらびやかな宮廷舞踊「レゴン」、またアゼルバイジャンのアズマ・グルナラさんのピアノ演奏は、ユーラシア大陸を駆け巡るような独特のメロディーであった。終わりに東京支部会員の安来節で、「どじょうすくい踊り」と銭太鼓(安来節・東京音頭)を演じ、会場を沸かせたと神奈川新聞・タウンニュースにも書いて頂いた。またネパール人のニルマル・スレタさん(三十歳)は「バリ舞踊は表情豊か、日本の踊りも気持ちがかもっていて素晴らしい」と紹介され、



ファイナーレは参加者全員で会場いっぱいになり、用意して来た約文字を配り、「キンニヤモニヤしゃもじ踊り」と紹介され、楽しく踊って頂き、盛会裏に終わる事が出来たと主催者の清水靖雄氏からお手紙を頂いた。

訃報



昭和三十一年に安来節保存会に入会され今日まで安来節保存会に多大なご功績を残されました。頃名人 西村利美さん(七十七歳)が平成二十六年十二月三十日逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。



昭和二十四年に安来節保存会に入会され今日まで資格審査員等を歴任され安来節保存会に多大なご功績を残されました。絃准名人 越野幸吉さん(八十八歳)が平成二十七年一月一日逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

平成27年唄い初め会支部競演結果

- 安来市長賞
- 安来市議会議長賞
- 安来市観光協会会長賞
- 安来商工会議所会頭賞
- BSS山陰放送賞
- 足立美術館賞
- 家納喜賞
- 安来節演芸館賞
- 加関大湖仁益尾飯
- 茂西東陵多田高南
- 支支支支支支支支支支
- 部部部部部部部部部部

事務局から

会報「安来節」に原稿をお寄せください。

安来節との出会いや思い、支部の活動や目標、保存会の今後などなど題は自由です。いずれも600字程度で顔写真(1年以内の物で使用後は返却します)も併せて送ってください。